

星喰いの赤龍帝

神様2001

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兵藤一誠は悪魔に親、友達を全て殺され自分も殺されそうになる。だがそんな時、地球外生命体エボルトと出会う。エボルトからエボルドライバーを託された一誠は悪魔への復讐を誓う。そんな中で一誠は無限の龍神オーフィスと出会う…。彼らの運命はどんなって行くのか…。

目次

目覚め	1
無限の龍神との出会い	6
設定（随時更新）	10
猫又姉妹との出会い	12
新しい家族。一誠の涙	20
リアス・グレモリー達との戦い	28
一誠の心	38
墮天使、シスターとの出会い	42
アジアの過去	49

目覚め

数年前

ある一人の少年が下半身は太く大きな四本脚、上半身は人間の男性のような体をした化け物と向かい合っていた

「ヒッグ： ヒッグ： お父さん： お母さん： 皆何処に行ったの…」

「チツ！うるせえガキだ。いいか？てめえの親や友達は全員俺が殺して食ったんだよ!!」

「何で… 何で殺したの！」

「はあ？決まってるだろう？人間は俺達悪魔の餌でしかない。面白かったぜえ？お前の友達は泣き叫び、親は子供達だけはと泣きながら頼んで来たんだよ！いやゝ本当に面白かった… じゃあ最後はお前だ！」

そして悪魔は俺を踏み潰そうとしてきた

嫌だ… 死にたくない… 死にたくない… でも

憎い……あの怪物が……生きたい……生きてあの怪物を悪魔を……
殺して！親の仇をとりたい！

そう思った瞬間目の前が真っ暗になった。

「ここは……？」

『初めましてだな、兵藤一誠』

「誰……？」

僕の目の前には赤と青と黄色の色を持ちレバーのついている物を腰につけ、姿はまるで宇宙をモーチフをしたような姿。黒の素体に所々に赤や青金色のパーツがついている。

『俺の名は仮面ライダーエボル。またの名をエボルト。まだこの地球では発見されていない未確認生命体だ！』

『未確認生命体？何でいるの……？さっきまであの怪物と僕の二人だったのに……』

『ああ……簡単に言うとな、俺は最初からお前の中にいた。』

『僕の……中？どうゆう事？』

『それはお前が産まれると同時に俺がお前に宿っちまったんだ。』

『どうゆう事？』

『お前はまだ母親の腹の中に居たとき一時的に弱っててな、その時にお前に宿りお前を回復させたんだ。』

『なら何で今まで出てこなかったの？』

『お前を回復するためにかんりの力を使ってな、その代償で記憶を失っていたんだよ。だがお前のさっきの感情のおかげで俺は力も記憶甦り出てこれたって訳だ』

『感情？』

『そうだ。お前の生きたい！憎い！殺したい！って感情でな！お前は
どうしたい!?このままあの悪魔に殺されるか、俺と一体化してあいつ

を殺すか!!さあどうする!?!」

どうする...? 決まっている!

「僕は力が欲しい!!あの悪魔を殺せる力を!悪魔に復讐できる力を!!」

『フッフッフツ... ハッハッハッハッ!!そうだ!その答えを待っていた!良いだろう!!』

するとエボルトは腰の物を外した。すると僕が現れた!

「え!?!僕!?!」

『この姿はお前に擬態しただけだ、さあ受けとれ!これはエボルドライバーだ!これでお前は宇宙最強の生命体となる!さあ!俺とお前の力を悪魔共に見せ付けてやれ!!』

僕は頷きエボルトの手を掴むとエボルトは輝きだした。

『今日からお前が仮面ライダーエボルトだ!後は全てお前に任せる。さあ行け!一誠!』

と言い残し粒子状になり僕の中に入った。するとこれはエボルトの記憶なのか僕の頭の中に色んな映像が流れてくる。そして全ての映像が流れ込んだ後、僕の目の前は再び真っ暗になった。

そして目が覚めると僕の目の前は悪魔が俺を踏み潰そうとしている瞬間だった

「... ハッ!」

俺は手を突きだし悪魔に向かって衝撃波を放ち悪魔を吹き飛ばした

「グオツ!?!... 何だ...? 貴様何をした!?!まさか神器か!?!」

これがエボルトの力... いや俺達の力!

「神器...? 違う。これは俺達の力だ」

俺はエボルドライバーを取り出し

? エボルドライバー!?!?

エボルトと同じ声が鳴り響き自動で腰に装着される。

そしてコブラのマークが描かれた?コブラエボルト?!

と歯車が描かれた?ライダーエボルト?を取り出しベルトの2つの穴に差し込んだ

コブラ！ライダーシステム！エボリューション！
再びエボルトの音声か鳴り響き、俺はレバーを回した。
そしてクラシックを思わせる音楽が流れ、前後にプラモランナーの
用な物が出現し、それと同時にボディらしき物が形成される。

? Are you ready??
「変身」

俺がそう叫ぶと同時に前後のボディがスライドされ、俺を挟み込
み、姿を変えた

? コブラ... コブラ... エボルコブラ!!フツハツハツハツ!!?
俺は自分の姿をみると仮面ライダーエボルへと姿を変えていた

「これが、仮面ライダーエボルか...なるほど。とりあえず今はあの
悪魔を殺すでしょう」

「姿を変えたところでえ!!!」

悪魔は俺を殴り付けようとするが高速移動で全て避けていく。

「ちよこまかとお!!」

「お前の攻撃は俺には当たらない...ハッ！」

「グアッ!!!」

高速移動で攻撃を全て避け続けていき、俺は悪魔の頭上へと移動し
殴り付け、悪魔は地面へと衝突した

「なんだ?もう終わりか?一発殴っただけだろ?」

「ハア...ハア...ま、待て!待ってくれ!もう人間には手を出さな
い!だから殺さないでくれ!!」

ブチッ

その瞬間俺の中で何かが壊れた

「フハハ...ハッハッハッハッ!!人間には手を出さない?だから殺さ
ないでくれ?ふざけるなあ!!!」

俺の怒号に悪魔は怖気付けついていた。

「お前は今までそうやって助けを求めた人間を殺したよな!?俺の親も
友達も全て!!なのに自分が殺されそうになったら助けを求めると
!?ふざけるな!!」

俺が言い切ると悪魔はこの世の終わりのような顔をしている。…：
が関係ない。」

「…： 終わりだ。」

俺は再びレバーを回す。そして再びクラシックを思わす音楽が流れる。そして足元に星座早見盤を模した、フィールドが出現し右足にエネルギーが収束される。

? Ready go! エボルテックファイニッシュ! チャクオク♪
?

「ハアアア!」

ドオオオオオオン!!

膨大なエネルギーが溜まった右足で悪魔を蹴り飛ばした。蹴り飛ばした所には悪魔はいなかった。きつと跡形もなく消えたのだろう。

「これで…： いいんだよな。皆…：」

俺はそこで暫く月を見上げていた

無限の龍神との出会い

一誠サイド

俺は仮面ライダーエボルへと覚醒してから各地のはぐれ悪魔を殺して回っていた

? Ready go ! エボルテックファイニッシュ! チャクオ
く!?

「ハア…この数日でかなり殺ったな…次の場所に移動する前に家に帰るか…」

俺はエボルトと一体化してからエボルトの力をコントロールできるようになっていた。ドライバーの使い方もエボルトの記憶から全て情報を得た事で熟知している。そしてエボルトが俺に授けてくれたのは、ドライバーだけではなくトランスチームガンとスチームブレードも授けてくれていた。

「にしても、エボルトは星を破壊して回っていたのか…俺は悪魔を殺していければそれでいいんだが…さて、どうしたものか…」

俺は家に帰ろうにも帰れずにいた。だってそうだろう…?目の前に黒髪ロングのゴスロリ幼女。おまけに胸元は開いて乳房はバツテンテープで止めている幼女がいるのだから。

「やっと思つた」

見つけた?俺を探してたのか?悪魔じゃない事は確かだ…まあ話だけでも聞いてみるか

「誰だ?お前?」

「我、オーフィス。『ドライバー』久しい」

『そうだな、オーフィス。』

「うお!勝手に出てくるなよドライバー…ビビったろ」

『ああ、すまないな相棒』

こいつはドライバー。俺が仮面ライダーエボルへと覚醒し暫くしたら右腕に籠手が出現したんだ。まあすぐに馴染んだけどな。まあ俺が今代の赤龍帝だ。

「んで、ドライバー。オーフィスって誰だ?」

『オーフェイスは無限の龍神という最強と言われるドラゴンだ。気を付けろ、今まで会ったやつの中で断トツでヤバいやつだ。』

「なるほど… なあオーフェイス。ここじゃなんだしき、一旦俺の家に来ないか？」

「え？」

『何を言っている相棒！オーフェイスは危険だと！』

「それを決めるのは俺だ。だが、こいつは危険な感じはしないんだよ。任せてくれ。それでどうする？」

「… 我、ドライブ達と行く」

「ああ、俺はドライブじゃねえからな…？俺は一誠。兵藤一誠だ」

「一誠。分かった。」

コクンと頷きオーフェイスは俺に近づいてくる。俺はオーフェイスに手を差し出しオーフェイスはそれを掴む。俺はオーフェイスと共に高速移動で家と帰ったがオーフェイスは少し驚いた表情をしている

「一誠、今なにをした？」

「え？いや、帰っただけだが？」

『相棒。オーフェイスが言いたいのが多分魔力を使わずここまで移動したのに驚いているのだろう。』

「ああ、そういう事か。まあ俺の力だ」

「一誠の力？」

「そう、俺の力。とりあえずついて来て」

俺はオーフェイスをリビングへと連れていき椅子に座らせた。

「オーフェイス。ジュース飲むか？」

俺はオレンジの缶ジュースをオーフェイスに渡すが、オーフェイスは不思議そうに見つめ尋ねてくる。

「… これ、何？」

「これは、ジュースっていう美味しい飲み物だよ」

「我、ジュース飲む」

そう言っただけジュースを飲もうとするが、プルタブの開け方が分からず首をかしげている。… 可愛いな

『相棒!?!』

ハッ!?違う違う。何を考えてるんだ俺は!!

「開けてあげるから、貸してごらん?」

俺は可愛いという考えを捨て、オーフィスから缶ジュースを貸してもらい、プルタブを開けてオーフィスへ渡す。オーフィスは再びジュースを不思議そうに眺めながらジュースを飲む。

「…美味しい。我、気に入った。」

オーフィスは足はパタパタさせながらジュースを飲んでいる。…やっぱ可愛い。何か癒される。…

『相棒く戻ってこ〜い』

ハッ!?まただ。…危ない危ない。…何故かさつきから変だな。…まあいいか

「それで?オーフィスは何で俺を探してたんだ?」

「我、一誠に、助けを求めろ。」

「助け。…だと?」

「そう、我、静寂を得たい」

静寂を得たい?どういう事だ。…?

『相棒、そもそもオーフィスは次元の狭間という場所で生まれたドラゴンでな。そしてオーフィスの他にもう1体次元の狭間で生まれたドラゴンがいる。』

「なんてドラゴンだ?」

『グレートレッドというドラゴンだ。だがオーフィスよ静寂を得たいというのはどういう事だ。』

「我、グレートレッドに負けた。そして、次元の狭間、追い出された。故に我、静寂を得たい。」

… 静寂か。静寂を得たらオーフィスはどうなる?一人になるんじゃないのか?そんなのは。…俺には耐えられないな

「一誠に。我、グレートレッド、倒したい。でも我、一人では無理。故に、一誠の力、借りたい。」

俺の力を。…か。確かに俺が手を貸せば、倒せるかもしれない。…だが、何故だろう。…オーフィスを一人にしたら行けない気がする。「オーフィスはさ、例えば静寂を得たとして、その後はどうしたい?」

「…？我、考えた事ない。」

オーフィスはきつとずっと一人だったんだろう… 決めた

「オーフィスはさ、暫く家で暮らす気はないか？」

「え？」

『相棒！何をいつて…「オーフィスは！」!?』

俺が声を荒らげたせいでオーフィスは表情は崩さないが、目を見開いており、ドライグは俺の話を聞いてくれている。

「オーフィスはずっと一人だったんだろう？俺にはずっと一人なんて考えられない。このままオーフィスが静寂を得てしまえば、きつとオーフィスは楽しい事も悲しい事も知らないままだ。俺はオーフィスを楽しいと思わせたい。オーフィスを一人にしたくないんだよ。オーフィスを俺みたいにさせたくないんだよ…。」

『相棒…』

俺はオーフィスの髪を撫でると再びオーフィスは目を見開く

「どうする？俺はオーフィスの意見を尊重する。もし静寂が恋しくなったら力を貸す。」

オーフィスはしばらく迷った顔をするが

「我、一誠と暮らす。静寂の事は、考える。」

「そうか、分かった。とりあえず暫くよろしくな？オーフィス。」

「ん…。」

ふと時間をみると時計の針は18時を指していた。

「もう、こんな時間か… よし。オーフィス。今からご飯作って来ること待ってて？」

「ん。分かった。」

俺はオーフィスから離れ晩御飯を作りに行く。

オーフィスサイド

暖かい… 一誠に、撫でられたときとても暖かった。初めてだった…

「また… 撫でて欲しい…」

設定（随時更新）

兵藤一誠（偽名で石動惣一と名乗る事もある）

この小説の主人公であり、今代の赤龍帝

姿は原作のままだがエボルトと一体化してから髪の色が黒から白へと変わり、目の色も赤へと変わる。

元々穏やかな性格だったが、悪魔に親を殺されてから少しだけ荒々しい性格に変わる。

オーフィスと出会う前までは悪魔ならば構わず殺しているが、オーフィスと出会ってから人間に危害を加えない悪魔には特になにもしない。生活費は親がずっと貯めていたお金で暮らしているため、無駄遣いはしないが、オーフィスには甘い。

ちなみにエボルトと一体化したのは一誠が七歳の時である。エボルトと一体化した事で子供が出来ない事は全て出来る。だがコーヒーだけは、相変わらず不味い。

仮面ライダーエボルへと覚醒してからドライグが目覚め、エボルとして戦っていたため禁^{バランス・ブレイク}手

もしよう可能。

ハザードレベルは10.0

一誠の所持している物

エボルドライバー

エボルトリガー

フルボトル全て

エボルボトル全て

トランスチームガン

スチームブレード

変身できるフォーム

エボルコブラ

エボルドラゴン

エボルラビット

ブラックホール

そしてマツドローグにも変身可能

メインはエボルコブラだが相手に合わせて姿を変える。ブラックホールはめつたに使わないが、相手が強敵な場合使用する。

好きな物：オーフィス、ドライグ

嫌いな物：人間に危害を加える物（特に悪魔）

オーフィス

この小説のヒロイン

姿は原作通り

ウロボロス・ドラゴン無限の龍神とも言われており、最強のドラゴンとされている。

昔グレートレッドに負け、次元の狭間を追い出された。そして再び静寂を得る為に一誠に力を借りに行くが暫く暮らさないと誘われ、暮らす事にした。だが一誠と暮らしていくうちにオーフィスに変化が訪れる

好きな物：一誠、一誠の作るご飯

嫌いな物：一誠が嫌う物

ドライグ

恥ずかしさで口にはしないが、最高の相棒だと思っている。誰よりも優しく誰よりも厳しい相棒を七歳にして最高の相棒だと思っている。一誠との出会いは一誠がエボルとして戦っている時であり、目覚めさせたのと同時に禁手に至ったのは一誠だけという。一誠の心が憎しみで支配され、覇龍に目覚めないか密かに心配している。

好きな物：一誠、オーフィス

嫌いな物：一誠の家族を殺した悪魔

エボルト

一誠がまだ母親のお腹にいたときに一誠が弱ってしまい、エボルトが母親から一誠へと憑依し一誠を回復させたが、回復させるのに思った以上に力を使い記憶をなくす。しかし、一誠が悪魔に親を殺された憎しみと殺意、そして生きたいという感情から記憶が甦り復活し、一誠にこのまま死ぬか、一体化し悪魔を殺すかの選択肢を与えた。一体化し悪魔を回復殺す事を選んだ一誠にエボルドライバーやエボルボトル等を渡し、一誠と一体化し粒子状となり、消えた。

猫又姉妹との出会い

一誠サイド

オーフィスが家で暮らし初めてから数日がたった。あまり変わった事がないがオーフィスはゲームにハマったのかずっとやりこんでいる

「一誠、我、ゲームしたい」

「おう、いいぞ。待ってる」

最近はおリオカートにハマっているらしく、ずっと遊んでいる。

「なあ、ドライブ」

『どうした相棒?』

「オーフィスって一応最強のドラゴンなんだよな?」

『そうだが?』

「無限の龍神がゲームやってるのって物凄いシニールだ...」

そう、オーフィスは無限の龍神...だが俺の目の前にはオーフィスが○リオカートをやっている龍神がいるのだ...

あ、3位だ。

「...」

オーフィスが少しだけ悲しそうな表情している。

「よし... オーフィス。良いこと教えてやる」

「?」

俺はオーフィスが3位になったコースの所にシヨートカットがある場所を教え、オーフィスにもう一度そのコースをやらせてみたのだが... お! 一位だ!

オーフィスも嬉しそうにしているが相変わらず表情があまり変わらないな...

「一誠のおかげで勝てた、ありがとう。」

「いえいえ。さてオーフィス? ゲームもそこまでにしてそろそろお昼にしないか?」

「ん、我、昼食べる。」

「よし! オーフィスは何食べたい?」

「オムライス」

「またか？たまには違う・・・「オムライス」・・・はいはい」

オーフィスは何故かオムライスが好きらしい。家で住み初めてからオムライスを食べた時にどうやら気に入ったらしい。

「材料、材料つと・・・ あ、卵がねえ・・・仕方ない。オーフィス」

「？何？」

「卵買って来るから留守番しててくれ。」

「ん、我、留守番してる」

そう言つてトコトコとソファに行きテレビを見始めた。

可愛いなあ・・・（。ヾ。）ハッ！俺は一体何を!?

『一人で何をしてるんだ相棒・・・』

何でもありません・・・とりあえず行くか。俺は荷物を持ち家をでたのだが・・・

「ドライグ・・・向こうから悪魔の気配がするんだが・・・」

『そうだな。数体の悪魔の気配がする。どうする相棒？』

「買いに行く前に一仕事していくか・・・全く面倒事がつきないなあ・・・」

黒歌サイド

ハア・・・ハア・・・早く妹の白音を助けに行かなきゃ行けないのに・・・私が『はぐれ悪魔』のせいで思うように動けないし、追っ手の悪魔に見つかると・・・ここで捕まる訳には行かないの！

「ようやく観念したか・・・お前を捕まえれば莫大な金が入る。だがその前にお前で楽しんでからでもいいだろう。」

「フン！あんたみたいな奴に尻尾を振るぐらいなら死んだ方がましニヤー！」

「いいのか？大人しくすれば妹は助けてやるが、抵抗するならば俺の仲間が妹を殺すぞ？さあ？どうする？」

「・・・本当に妹は助けてくれるのね？」

「ああ・・・約束しよう。さあこっちに来い！」

正直言つてこんな奴に初めてを上げたくないし、生きたい。それにまだ大切な白音とまだ生きていたい！笑っていたい！

「お願い…誰か助けて…」

私は叶うことのない願いを口にし、もう駄目かと思った時

「諦めるな」

「え？」

私が声が出た方を見るとそこには私を殺そうとした悪魔が粒子状になり消えて行くのと、それを見つめる子供の姿があった

一誠サイド

間に合ったか。勢い余って殺してしまっただが…まあ終わりよければ全て良し…という訳ではなさそうだな。てかものすごく警戒されてんな

「貴方…何者？普通の人間じゃないわよね？」

「俺は…まあその話は後だ。妹を助けたいんだろ？」

「!?なんでその事を！」

「ん？ああ、さっきの屑が妹をどうか言っていたからな。どうする？妹を助けるなら協力するぞ？」

「…本当に助けてくれるの？」

「ああ、約束しよう。」

「…分かったにや。私は黒歌、よろしくにや！」

「黒歌か、分かった。それで、妹はどこに連れて行かれた？」

「私が案内するにや！着いてきて！」

「いや、道案内だけ頼む」

「どういう事？」

「こういう事だ！」

「ニャアアアアア!!!」

俺は黒歌抱え高速移動で黒歌の妹の所へと向かった。ただし向かっている途中少し迷った事は俺と読者の内緒だ

白音サイド

「フハハハハハ！追い詰めたぞ！さあ観念してこちらへ来い！」

「嫌です！私は姉様と一緒に生きるんです！」

「そうか…なら死んでもらおう。なあに。安心しろ！すぐにお前の姉もそつちに送ってやるよー」

嫌だ… 死にたくない… 私はまだ生きたいんだ!… でもどうすれば… そんな時…

白音ええええ!!

轟音とともに姉様の声が聞こえる

「姉… 様? どこですか!?!」

「姉!?! 黒歌か!?! どこに… グヘエ!」

「白音! 大丈夫!?!」

「姉様… !と?」

「初めましてだな。白音でいいんだよな? よく耐えたな。後は… 俺に任せろ」

その人の姿は私と背は変わらないが、その後ろ姿はとても頼りたくなる背中だった。

一誠サイド

「さて…」

俺はさつき蹴り飛ばした悪魔の方へ振り向くと鬼の形相でこちらをみていた。

「人間風情がああ! この私に傷をつけたなあああ!!」

「人間? 悪いけど俺は半分人間辞めてんだよ」

「え? 人間を辞めてる… ? それって…」

「まあ見てろ。」

俺はエボルドライバーを装着する

? エボルドライバー!?

コブラエボルボトルとライダーエボルボトルを取り出し上下に振った後に蓋を正面にセットし、エボルドライバーに差し込む

コブラ! ライダーシステム! エボリユーション!

レバーを回すと同時にクラシックを催す音楽が辺りに鳴り響き、最後にプラモランナーの用な物が出現し、それと同時にボディが形成される。

? Are you ready??

「変身」

ボディがスライドし俺と融合する。

コブラ… コブラ… エボルコブラ！フツハツハツハツ！

エボル… フェーズ1

「何だその神器は！新種か!?」

「いちいち五月蠅い悪魔だ。お前に説明する物でもない」

「フン。こけおどしが、良いだろう。お前を殺した後にその二人も殺してやる！」

「御託はいいからさっさとかかってこいよ」

「なら後悔するなよ！」

悪魔は俺を人間だと信じこみ、すぐに俺が終わるとでも思ったのだろう。素早く拳を俺に放つ… が

ガシツ！

「なにっ!?!」

俺は余裕で拳を片手で受け止める。悪魔が力を込める… が俺は握力を増し、悪魔を苦しめていく

「グアアツ!!何て力だ！放せえ！」

「良いだろう… オラアア!!」

「ゴハツアアア！」

俺は悪魔を空中へ殴り飛ばし、落ちてきた所を回し蹴りで蹴り飛ばす。

「貴様ああ… 何故あの姉妹の味方をする！あいつらはなあ!?!」

「やめてえ！」

「自分の主を殺し、逃走したはぐれ悪魔！黒歌と白音だよお！俺は正しいのだ！主を殺した悪魔を倒す！ヒーローなんだよお!!」

黒歌と白音は絶望した表情でこちらを見つめ、悪魔は勝ち誇った顔でこちらを見ている。だが…

「さあ！今ここであいつらを殺した暁には俺にした仕打ちは許してやろう。さあ！あいつら、ゴホオオ！」

俺は悪魔の鳩尾を殴り付け、悪魔を痛みのかげりに倒れる

「!?!」

「貴様何をおお!?!」

「知ってるよ。全部」

「な、何!？」

「こつちに来る前に黒歌の記憶を覗かせてもらったんでな。で?こいつらが主を殺した... まあそれは合ってるなあ... で?こいつらが悪魔になった経緯は?」

「そ、それは!こいつらが自分か「違うよなあ!?!お前の主が強制的に黒歌を悪魔にさせた!妹の白音を使ってなあ!本当にろくなやつがないよなあ!オラア!!」ガハアアア!」

俺は悪魔をありったけの力を込めて殴り飛ばす。すると後ろから白音が

「どうしてそこまで私達の為に怒ってくれるんですか!?!まだ会って間もないのにどうしてそこまで!!」

「俺はなあ、白音。昔な家族と友達を全員殺されたんだよ。」

それを聞いて黒歌も白音も驚いている。まあそれもそうか...

「本当に無残な殺され方だな... 首を斬られ内臓を取り出し、ただただ惨くてな... その時俺は何も出来なかった... 俺にはこんなやり方しかできないが、この力で誰かを救えるなら救ってやる。この身を賭けてもなあ!」

俺はそういい放ち灰色のボトル。ガトリングフルボトルを取り出す

「さて... ここにいる黒歌と白音以外の奴らは全員皆殺しだ!!」

? 機関砲!ライダーシステム!クリエイション!?

ホークガトリングアが出現

? 機関砲! finish!!?

ホークガトリングアのリボルマガジンを回転し弾丸を装填していく

「Ten! Twenty! thirty! forty! Fifty! sixty! seventy!

Eighty! Ninety! One

Hundred!フルバレット!」

百発の鷹の姿をしたエネルギー弾を目の前の悪魔や気配のする方へ打ち続けた。

「さて、片付いたが…：…仕上げが残っているな。」

俺はあらかた悪魔を片付けが、目の前の悪魔だけをわざと残していた

「どうする気だ…：？」

「本当ならじわじわ苦しめて殺そうとしたんだが…：…やめだ。これで終わらせる。」

レバーを回す。

拳にエネルギーが溜まっていく

「分かった！もうあの二人に危害は加えない！だから逃がしてくれ！頼む！」

「駄目だ。」

？Ready go !??エボルテックファイニッシュ！チャオ！?

「又アアアア!!」

「ゴハツ…：」

俺の拳は悪魔の体を突き抜けており、悪魔は粒子状になり消えて行った。

白音サイド

私達を追っていた悪魔は居なくなつた。でも目の前にそれ以上の存在がいる。どうなるんだろう…：

「さて…：帰るぞお〜」

「え？帰るって何処へ!？」

「何処って…：俺の家だけど？」

「ちよつと待つて欲しいにゃん!!私達のはぐれ悪魔よ!?!助けてくれたのは感謝するけど、いきなり家に来いって…：」

「逆にどこも行くところ無く、危険のある外に行くより、安全な場所にいる方がいいだろ?それに…：」

「それに?？」

男の人は薄ら笑いを浮かべながらしながら

「さっきのを見て俺が負けるとでも?？」

「ああ…：」

私達姉妹はちよつとだけ、同情してしまった。

新しい家族。一誠の涙

一誠 side

さて…あれから少し時間が経ち…黒歌と白歌を連れてきた訳なんだが…実は今俺は正座をさせられている。その理由は…

「一誠？」

「はい…。」

「我、ずっと待ってた。」

「それは重々承知しています。」

「ずっとお昼待ってたのにどうして遅くなった？」

だってオフィスが怒ってるんだよ!? 帰ってきたらオフィスが怒気を撒き散らしてるんだよ!? 流石の俺でも怖いし、ドライブに關しては怖いって神器の奥深くに閉じ籠っちゃったよ!?

「その…材料買う前に悪魔の気配がして、そこに向かったら黒歌と白音が襲われてまして助けてたら忘れてしまいました…。」

頼むからそんな怒気を含みながら俺をみないで!? 黒歌と白音も震えてるから!

「分かった」

「え? な、何を…?」

「二人を助けるのに遅くなったのは仕方がない。今日は許す」

「あ、ありがとう」

「ん」

コクンと頷きトテトテとテレビへと戻って行くオフィス。いまだに震えている猫又二人、安堵している俺。なんだ? この凶?

「さて…改めて自己紹介いこうか。」

あれから落ち着きを取り戻した俺達はオーフィスを呼び、自己紹介を始める。

「俺の名は兵藤一誠。今代の赤龍帝であり、とある昔に惑星を滅ぼし、自らのエネルギーに変えてきた地球外生命体の遺伝子を持った人間だ。そして…またの名を仮面ライダーエボル。」

「仮面ライダー…？」

「そ、全ての人の自由を守る戦士の名だ」

「それが仮面ライダー…」

「何か格好いいにやん！」

「だが俺は違う」

「え？」

黒歌達が不思議そうな顔でこちらをみているが言わなければならぬ。例え失望されようと、最低と罵られようと。

「全ての人の自由を守るとは逆に人の自由を奪う者、自分の目的の為に躊躇なく人を殺したり、大量殺人犯…様々だ。俺はそこに入るだろう。」

黒歌達は絶句していた。それもごもつともだろう。自分達を助けた奴の本性がこんなやつならな

「…じゃあ一誠は何なんにやん？」

「俺は殺したり奪ったり…いわば穢れ役だ。正義の味方何て良いものじゃないんだよ。それに言っただろ？俺は昔、星々を破壊し自らのエネルギーに変えてきた地球外生命体の遺伝子を持っている。つまり何千、何万の命を奪ってきた事と何ら変わりわないんだよ。」

「何千、何万の命を奪ったきた事と何ら変わりはないんだよ。」

分からなかった。この人が何故悲しい顔をしているのか。自分の事を語る時とても悲しそうな顔をしているのが。それに自分達姉妹を助けてくれた人がそんな顔をするのは耐えれなかった。

「…う」

「?どうしたにや?白音?」

「違う!!」

「!?」

「は、白音?」

私が急に叫んだ事に一誠さんもオーフィスさんも黒歌姉様も驚いていたが言わなきやならない。

「例えその大量殺人犯や躊躇なく人を殺したりするライダーはいたのかもしれない!私達はその人達をみたことがありません…ですがそれと似た人達はみたことはあります。でも一誠さんは違います!例えその遺伝子を持っていたとしてもです!一誠さんは私達を助けに来てくれた時!とても優しい目をしていました!大丈夫かつて!あの時心の底から安心できた自分がいたんです…だから…」

「自分の事をそんな風に言わないでください!!」

「白音…」

一誠 side

嬉しかった。何故だろうな…エボルをやってきて穢れ役をやっている嫌われる事だっであつた。だけど感謝される事は無かつた

「…そうか」

すると…

「一誠」

「オーフィス?」

「我也感謝してる。我に静寂以外に興味を示してくれたことも。ナデナデしてくれた温もりも、全部一誠がくれた。だから、ありがとう。」

駄目だ…今まで押さえてきた感情が…何もかも溢れてしま
う…そして

「大丈夫。泣いてもいい。」

「悪い……」

俺は泣いた。泣き叫ばず、ただ静かに。オフィスは俺は抱き締め
てくれ、何も言わず頭を撫で続け、黒歌や白音達も慰めてくれた。

俺は落ち着きを取り戻し黒歌達に話始じめる

「俺はな？人に感謝される事何て無かったんだよ。いつも恨まれてた
からな。だから今、黒歌や白音、オフィスに感謝されたのが嬉し
かったんだ……ありがとう。」

俺がそう言うのと照れ臭そうに黒歌が

「どういたしましてにや！でも何であの無限の龍神ウロボロス・ドラゴンがいるのにや？」

「ああ……それは」

青年説明中

「なるほど……そんな事があったのね？」

「そ、これがオフィスとの出会い。まあ今はこんな感じだけだな」

「な、なるほどね」

黒歌と白音はオフィスの方に目をやると苦笑いをしていた。俺
が泣き終った後、疲れてしまったのか寝てしまい今現在は俺の膝で寝
ている。

「私達の説明どうしようかしら……」

「そこは大丈夫だ」

「何でにや？」

「ほら、黒歌の記憶をみたって言ってただろ？俺は人の記憶を見るこ
とも、見せる事もできる。だから、オフィスが起きたら俺が事情を
説明して、記憶をみせるよ。」

「分かったにや〜」

「あ、そういえば一誠さんのあの姿って他に種類はあるんですか？」

「エボルの事か？」

そして俺は黒歌達の前にコブラエボルボトル、ライダーエボルボト
ル。そしてドラゴンのマークが描かれたドラゴンエボルボトル、そし
て、兎のマークが描かれたラビットエボルボトルそして、黒と白を基

調としたエボルトリガーをみせる

「色々種類があるんですね…」

「あ、このコブラの奴と歯車のボトルはさつき使ってたやつにやん！」
「そ、このコブラエボルボトルとライダーエボルボトルでエボルコブラ。ドラゴンエボルボトルとライダーエボルボトルでエボルドラゴン。ラビットエボルボトルとライダーエボルボトルでエボルラビツトだ。」

「色々あるにやんね…。何にか違いはあるにやん？」

「エボルコブラは仮面ライダーエボルの初期段階と言っても過言ではない。あれでも完全体の2%だしな。」

「あれで2%なんですか!？」

「そう、あれで2%だ。エボルドラゴンはエボルコブラより強力でな、純粋に戦闘に特化している。エボルラビツトは攻撃力はエボルドラゴンより劣っているが機動力は高い。」

「へく色々用途があるのね？」

「そういう事になるな」

「じゃあこの白黒の物はなんですか？とても不気味なんですけど…？」

「あ、私も気になってたにやん。ボトルじゃないし…。一体なんなの？」

「ああ…。これか？これは…」

俺がエボルトリガーの説明をしようすると

「…ん」

オーフェイスが目覚め、目を擦りながら

「起きたのかオーフェイス。おはよう」

「ん。一誠…。おはよう」

と、オーフェイスと話していると

グッ

「あはは…。お腹空いちやっただにやん」

「姉様…」

黒歌の腹の音がなり白音が呆れ顔で黒歌をみていた

「ああ…もうこんな時間か…」

時間をみると時計の針は19時前を指していた

「よし、エボルトリガーの話は後だ。今から簡単に何か作るか！何か食べたいのはあるか？」

「え？ご馳走になつていいんですか？」

白音がそう問いかけるが

「ご馳走？いやいや、俺達家族だろ？」

「え？家族ですか!？」

「なあに驚いてるんだよ。」

「ちよつと待つにゃ！あの時も言ったけど私達は追われている身。一誠やオーフィスに危険が及ぶかもしれない！それでもいいの!？」

「なあんだそんな事か」

「いや、そんな事つて…」

姉妹息ピツタリだなおい

「いいか？まず今は幼女の姿をしているがあの子は無限の龍神…あの程度の悪魔には遅れなんざとらねえよ。一度本気で戦ったが五分五分だったしな。」

「あの無限の龍神と五分五分つて…」

「ヤバすぎるにゃん…」

「それに俺が危険に晒される…何て事はこれからもあるだろう…と、というか昔あったしな。ま、安心しろ。俺は誰にも負けはしないし、お前達を傷つけさせやしない。もし追つてがくるようなら俺が潰す。俺から家族を奪うようなら尚更だ。だからお前達は安心して住めばいい。」

「本当にいいの…?」

「当たり前さ。というこで…」

「?？」

「これからよろしく頼むぞ? 黒歌! 白音！」

俺がそう言うのとびっきりの笑顔で

「よろしく頼むにゃん! 一誠! オーフィス！」

「お願いします!」

「よろしく」

相変わらずオフィスは無表情に近かったがその時だけは微かに笑顔が表れていた。

え？ドライブはどうしたって？まだ閉じ籠ってるよ？あ、ドライブにも後で説明しよう。

俺にとって大事な家族ができたって事を

「あ、晩御飯は魚がいいにやん!!」

「あ、聞いたってなんだけどそれこのタイミングで言うのね」

俺が黒歌はボケ担当だって思ったのは秘密だ

リアス・グレモリー達との戦い

一誠 side

あれから数年が経ち俺と白音は高校へと入学した。そうそう、白音は高校へ入学する際に名前を変えた。兵藤小猫として今は生活している。何故名前を変える必要があったかって？この高校の上層部や一部の人間が悪魔だからだ。今白音達は追われている身だし、名前を変えてしまう可能性もあるため名前を変えた。ん？黒歌？ああ、黒歌はそのまんまでいいとよ。そして今、黒歌には俺とオーフィスの親として、変わらず白音の姉として生活している。近所の人には親が事故で亡くなってしまい、遠い親戚が来てくれたとという事になっている。

近所の人達には可哀想やと言われる事もある。確かに親を亡くした事は辛い俺には大事な家族が出来た事は嬉しい事である。お金は親が将来の為にコツコツ貯めていたお陰で大量にある。一体何の仕事をしていたのだろうかとうと今でも思う

「では、一誠さん。また後で」

「おう、しっかりな」

俺と小猫は学年が一つ違う。俺が二年、白音が一年だ。そして俺のやる事はほとんど変わらない。学校が終われば家で過ごしているが、はぐれ悪魔が出現すれば殺しに行くし、ある知り合いから依頼を受ける事もあるがその話はまた後で良いだろう。

俺は教室へ着くといつも通り、友達と挨拶を交わし静かにしているのだが……

『相棒……まただぞ……』

言うなドライグ……あえて無視してたんだぞ？

『すまん……』

別にお前が謝る事じゃない。にしても毎日毎日飽きないよなこいつら。

『全くだ』

俺はクラス奴らが外をみて騒いでるのを呆れながら俺も視線を外に移すと外に人だけができていた

「おい！リアス先輩が歩いてるぞ！姫島先輩も一緒だぞ！」

「木場君もいるわ！二人を守る騎士みたい！」

人だかりの中心には二人の女性と男が一人いる…。でもあいつら悪魔だな。長年悪魔と殺りあつていれば馬鹿でも分かる。

『あの悪魔達は殺すのか相棒？』

「いきなり殺しはしねえよ。まあいつか悪魔狩りの時にでも会うだろう。まあ見た感じ白音よりは弱いなあ…。戦うとなったら楽しませてくれればいいんだがなあ…。」

『完全な戦闘狂だな』

「褒めるな」

『誰も褒めてねえよ』

などと小声でドライグと漫才じみた事をやっていると外から視線を感じる。その方を向くと紅髪の女性…。リアス・グレモリーと目があつた。すると驚いた表情をし、視線を真っ直ぐに戻した。

「…俺あいつ嫌いだなあ」

『相棒？』

何でもないよ…。それより

「このばか騒ぎどうにかならないものかなあ…。」

『こればかりは諦めろ』

リアス side

あの白髪の子…。兵藤一誠君だったかしら？目が合ったとたん得体の知れない何かを感じた…。対象するべきなのかしら…。でも接触してみる価値は十分あるわね…。

「佑斗、今日の放課後に兵藤一誠君を部室まで連れてきてちょうだい」
「分かりました。部長」

一誠 side

今日の授業が終了し、帰り支度をしていると悪魔の気配が近づいてきた。

「…悪魔が近づいて来てるな。明らかにこの教室に向かっている

な」

『どうするつもりだ？小猫と帰る約束もあるのだろうか？』

「そうだな．．．今日は逃げるか。さっさと白音の所に行つて、瞬間移動で帰るかあ」

俺は素早く帰り支度をし、白音の教室へと向かった。その頃

「やあ、兵藤一誠君つて、まだいるかな？」

木場が教室に来ていたらしい。無駄足だったな。

「小猫く帰るぞく」

「分かりました！」

といつも通りに帰る予定だったが、今日は仕方ない。俺は小声で

「ちよつと面倒な事になりそうなんだ。人目の無い所で瞬間移動を使う」

「面倒事？一体どうしたんですか？」

「説明は後だ、行くぞ」

「分かりました。」

俺達は人目の無い所に移動し瞬間移動で家に帰宅した

佑斗side

やあ、初めましてだね？僕が木場佑斗。二年さ。僕は、部長に頼まれて兵藤一誠君の教室に行つたんだけど一誠君はいなかったため、部長に一誠君が不在だった事を知らせた

「そう．．．ご苦労様。こんな都合よくいないものかしら．．．まあいいわ。なら、明日の朝にでもお願いしていいかいら？」

「分かりました。部長」

一誠side

俺と白音は家に帰った後、白音に事情を話した

「なるほど．．．そんな事が」

「そ。もしかしたら明日接触してくると思うけど、適当に答えとけばいいよ。」

「分かりました。とりあえず私は課題を終わらせてきます。」

「了解」

白音は自分の課題をやり、黒歌とオフィスは寝ていた。ゲームをやっていた形跡があったので遊び疲れたのだろう。まあ俺達が学校でいない間、二人で家事をやっていてくれるから文句はないがな。にしても…」

「スウ… スウ…」

「気持ちよさそうに寝てるな…」

『本当だな。にしてもあのオフィスが寝るとは… 初めてみた時は驚いた』

「俺も最初は寝るんだなって思ったが、良いだろ。意外な一面もみれるし、可愛いし！」

『お前はただ可愛い可愛いオフィスがいいんだろう？』

「うるさい…」

『あれえ？顔が赤いぞ？』

「黙れええ!!」

「うるさいですよ！一誠さん！」

「解せぬ…」

数時間後

『今日も行くのか？』

「当たり前だ。だが、今回はそれだけじゃあない」

『他に目的があるのか？』

「ああ、今回ははぐれ悪魔を見つけた瞬間ステイングヴァイパーで殺す。その後隠れてあいつらの様子をみる」

『ほう… ま、やり方は相棒に任せるとしよう』

『おう、任せとけ。てことで黒歌！』

俺が黒歌を呼ぶと上で足音が聞こえ下に降りてくる音が聞こえる

「呼んだにやん？」

「今からはぐれ悪魔狩りに行く。家の事頼むぞ」

「任せてにやん！で、今回は何で行くにやん？」

「今回はこいつだ」

そう言つて俺は一つの拳銃。トランスチームガンとコブラロスト

ボトルを振り、キャップを正面に合わせスロットに挿す

?コブラ...?

すると毒々しい音楽が鳴り響く。トランスチームガンを下から上にあげる

「蒸血！」

?ミスト... マッチ... !コブラ... コ、コブラ... ファイヤー!!?
煙が俺を包み込む。そして火花が散り、煙が晴れていく。そこには、全身が赤い宇宙服と、胸部装甲にエメラルドカラーコブラを象つたまるでダークヒーローのような姿。ブラッドスタークへと姿を変
える

「今日はそれなのね？」

「ああ、エボルで行くと下手をすればあいつらを殺しかねないしな。それにあいつら程度の相手にエボルを使うんだったらこつちの方が丁度いいかも知れない...」

「まあ、あまり大事にしないようにね？」

「安心しろ、別に殺す訳じゃない。じゃ、行ってくる」

俺は瞬間移動ではぐれ悪魔の反応があつた場所向かい、悪魔を瞬殺... いや、あいつらの力を試してみるか！俺は、バルブが装着された片手剣をとりだし、そのバルブを回し、はぐれ悪魔に突き刺す
デビルスチーム！

さあ？お前たちの力をみせてもらおうぞ？

リアス side

「なんなのこの怪物は!？」

私達は大公からの依頼いではぐれ悪魔討伐に来ていたのだけど...
そこにいたのははぐれ悪魔ではない分厚い装甲を持ち巨大なパワーアームがついた青い怪物だったの！

「姿からして悪魔でも、天使でも、墮天使でもないようですわ」

「ですが姿からしてパワー系... 一気に決めましょう部長！」

「そうね... 行きなさい！私の下僕達！」

「はい！部長！」

そこまでは良かったのだけど...

「グオオオオオ!!」

「クツ… 消し飛びなさい!」

「雷よ!」

私の滅びの魔力と朱乃の雷で攻撃しているけど一向に聞いている様子はないし、隙について佑斗も剣で攻撃しているのだけど全て跳ね返されている。

「何で滅びの魔力が効かないのよ!」

そう叫ぶと… どこからか

「それはお前が無能だからだよ… リアス・グレモリー」

? スチームブレイク! コブラ!?

声と音声が聞こえた瞬間目の前の怪物は爆発し、跡形も無く消えた

一誠side

正直ガツカリだ…あの程度のスマッシュも倒せぬとは…

「何で滅びの魔力が効かないのよ!」

ああ〜もうみてられん。

「それはお前が無能だからだよ…リアス・グレモリー」

コブラロストボトルをトランスチームガンへセットしエネルギー弾を青いスマッシュ…ストロングスマッシュへ放つ。そしてスマッシュは爆発し、消えていった。

「ご苦労さん…さて後は」

グレモリー達の方へ顔を向けると木場と姫島朱乃は警戒していたのだがグレモリーだけは鬼のような表情でこちらをみていた

「私が無能つてどういう事よ!」

「おおく怖い。どういう事って言っても言葉通りだよ。見回りもせず、自分の管理内にこうも簡単にはぐれ悪魔の侵入を許し好き勝手な行動さえも許している…そのせいで罪の無人間が死んでいる。」

「そんな情報は入ってないわ!!」

「当たり前だ。俺がこの町へ来たときから、はぐれ悪魔が侵入する前に俺が排除し、人間が襲われるような事があれば助けているからなあ…ま、はぐれ悪魔の排除は昔からしていたしな」

「昔から…?てことは昔からはぐれ悪魔を討伐して回っているとうあの!?!」

「ほうく…?俺も有名になったものだな」

「… 貴方は何者なの!?!」

「おおっと!自己紹介がまだだったなく…俺の名はブラッドスタークだ。以後お見知りおきを」

「ここは私の管理内よ!?!勝手な事をしないでもらえないかしら!?!」

え〜助けてやっているんだから礼じゃねえのかよ…

「俺が知るか…助けてやってるんだから文句を言われる筋合いは無いんだがな」

「黙りなさい!」

そう言い滅びの魔力を俺に放ってくるが

「フッ！」

俺はその魔力を腕で払いのける。ん？何で驚いてんだ？

「な、何でさっきの怪物といい貴方といい私の滅びの魔力が効かないの!?!」

「ああ？単なるお前の実力不足だろ？」

「そんな事は無いわ！私は魔王様の妹なのよ!?!貴方なんかには負けるはずが無いわ!!」

ふーん… こういう感じかあ… やっぱり嫌いなタイプだ

「魔王の妹だから何だ？魔王の妹だから実力があるってか？少なくともお前は俺にはもちろん、俺の家族に勝てない。と？言うことは魔王の血筋がない俺達よりも弱いというこは？落ちこぼれってか？フハハハハ!!」

「黙りなさい!!」

「黙るのはお前だよ… グレモリー」

ロックフルボトルを取り出し拳銃をセットする。

?フルボトル！スチームアタック!?

鎖型？エネルギー弾が飛び出しグレモリーへと巻き付いていく

「離しなさい！」

んゝ実力は無くとも態度もでかく、口も達者か… もういい黙らせよう

「フッ！」

「カハッ」

俺は手刀でグレモリーを気絶させ、壁へ投げつける

「終わりつと… さて、奇襲をするならもう少し上手くやれよ… 騎士君？」

「貴様あ！よくも部長をお！」

木場が素早い動きで剣を振るってくるが拳銃からブレードへと持ちかえ、防ぐか受け流していく。

「素早い動きで相手を翻弄し、斬りかかる… 悪くない。だが、残念だったなあ！相手が悪かったなあ！」

俺はスチームブレードのバルブを回す

?アイススチーム!?

アイススチームを発動した後、ブレードを地面へ突き刺し辺り一面を凍らせる。すると後ろには斬りかかろうとしていた木場の足元が凍っており動けないでいた。

「クツ… 動けない!」

「お前にはもう用はない。じゃあな」

コブラロストボトルをスチームガンへセットする

コブラ!スチームブレイク!コブラ!

ガアアアアン!!!

エネルギー弾を木場へ放つと木場はエネルギー弾とともに壁へ衝突し気絶する。

「二人目も完了… とりあえず、さつきから鬱陶しいんだよテメエはあ!」

木場と戦っている時から雷を振り落とし続けていたのだが全て避けながら戦っていたのだがいい加減鬱陶しい

「よくも部長と木場君を!絶対許しません!」

「あの無能が手を出してきたんだだろうが!てか話時ぐらい雷落とすなよ!聞こえにくいんだよ!」

「そんな事知りませんよ!雷よ」

「ふざけんな!俺、雷嫌いなんだよ!」

俺は雷を側転やバク転で避けていく。

「ハア… もういいか。終わらせよう… そろそろ面倒だ」

俺はスチームブレードとスチームガンを合体させる

?ライフルモード?

ロケットフルボトルをセットし、構える。

?フルボトル!スチームアタック!?

ロケット型のエネルギー弾を発射し姫島朱乃めがけて飛んでいく

「さあ、避けてみな?」

「この程度!」

避けられるか… まあ、計算書通りだ

「ああ、いい忘れてた。そいつは追尾式だ。気を付けろよお」
「何ですって!? キヤアアア!!」

「ああ、だから気を付けろって言ったのに…。まあ、いいか。じゃ、今日はお開きだ。ciao」

俺はスチームガンから煙をだし。その場から消えた。

「ただいま。え？」

戦いを終え変身を解いた俺は家に入ると…

「お帰りなさい!!!」

三人でめっちゃyasoburaやってた。しかも部屋めっちゃめっちゃ散らかってるし…

「お前ら片付けろおお!!」

ハア…。違う意味での戦いが始まりそうだ…

リアス side

クツ…。あのスタークっていう男…。今度みつけたらただじゃおかない! でも、もし眷属できれば…。ウフフ!! アハハハ!! あいつを眷属にできればまた私は強くなれる! アハハハ!!!

続く

一誠の心

一誠 side

俺はリアスグレモリー達との戦いを終え家に戻って来たのだが…
「さて… 何でこんなに散らかっていたのかを説明を貰おうか？」

そう、家に帰って来たら部屋にゴミや様々な物が散乱していたのだ… そして三人に部屋を掃除させた後に正座させて説教している所だ。

「ええ〜と… 一誠がはぐれ狩りに行った後、暇になってゲームしてただけどオーフィスが起きてきて我もやるって言い初めた訳で…」

「ほう？それで？」

「その後、白音も課題が終わって遊んでたら…」

「遊んでたら？」

「気付いたらこうなってたにゃん♪」

「あくはいい」

実は俺がはぐれ討伐に行った後、家が散らかっていた… いや最初は破壊されていたと言った方が正しいだろう。部屋だけじゃなく、リビング、キッチンの家具やその他諸々破壊されてたんだよ… ん？破壊された物はどうしたって？そこは俺の能力で… ね？まあ、そんな事があったから今されてる感じもある。物が散らかっているぐらいならまだ許せるしな。

「たく… 何回も言っているけど気を付けてくれよ？散らかるぐらいなら良いけどまた破壊なんかされたら堪ったもんじゃねえからな。いいな？」
「「「ごめんなさい（にや）」」」

「分かればいいよ。さて… 夜も遅いしなあ〜俺は後でもいいから3人で風呂入ってこい！はい！Go!!」

そういうと3人は着替えを持って風呂へと向かって行った。

「ふう〜… んで？起きてんだろ？ドライグ」

「気付いたのか」

俺がドライグに声をかけると右腕の籠手…

ブースデット・ギア
赤龍帝の籠手が出現

し、宝玉から声が鳴り響く

「そりやあな。無言だったただけだろ？」

「いや？片付けの時は寝ていたぞ？」

「いや、寝てたんかい」

「まあ、この漫才みたいなのはやめて… 戦ってみてどうだった？」

「あくグレモリー達の事か… はつきり言って駄目だな。あの程度のスマツシユ一体に3人で挑み、負けた。正直終わってる。白音と黒歌は二人でクローンスマツシユを倒せるぐらいだがハザードスマツシユは一人でも倒せるぐらいの力を持っているのになあ…」

「まあ、相棒との特訓でここまで強くなっただがな。あの鬼畜な特訓をな！」

「まあ… 木場の戦い方は悪くなかった」

「グツと話をねじ込みやがった…」

「持ち前のスピードで相手を翻弄し相手を攻撃… 姫島朱乃のは雷をやたらと落としてくるが一発一発の威力はデカイ… が、問題はグレモリーだ。人の話は聞かないあげく？滅びの魔力だっけか？あれは強力だろうが使い手があればじゃ宝の持ち腐れだ。あれは人の上に立つ者じゃない。二人は見込みはあるが、グレモリーは今の所は皆無だ」

「ほう… ならエボルで行かなくて正解だったろうな。行つてたらあいつら死んでいたぞ？きつとな」

「だろろうな。スタークはエボルの劣化番… 使える能力も少ないし、スペックもかなり劣る。おまけに必殺技は超新星爆発並だ… 誰だつて死ぬだろ」

「… まあ、一部死なない奴もいるけどな。まあ、それは本当にごく一部だ… 少なからず魔王クラスの奴らが死ぬか死なないかぐらいだろろうな」

「まあ、俺だつてあれは食らいたくなねえ。全盛期の俺でも致命傷だろうしな。奴の力で半減しようが俺達は負けただろろうな。」

「… 買いかぶり過ぎだドライグ。俺はまだまだだ。あいつらを守れるぐらいにはなりてえんだよ… もうあんな思いは嫌だしな」

ドライブ side

「あいつらを守れるぐらいにはなりてえんだよ。…もうあんな思いは嫌だしな」

相棒があんな思いは嫌だと言ったとき後悔、殺意、喪失感を感じた。…が守れるぐらいにと言ったときどこか愛しさを俺を包み込んでいた。

「あいつらとは…白音達の事か？」

「そうだなあ…白音、黒歌、そしてオフィスだなあ。あの三人は俺を支えてくれている。親を殺され、心が壊れかけ…ただはぐれ悪魔達を殺すただけだった俺がオフィスに出会い、白音と黒歌に出会い、変わったんだ…感謝してるんだよ。あの三人には…あ、この事は三人には言わないでくれよ？聞かれたら恥ずかしいんでな」

何だ？この感覚は？今まで感じたことがない…この心が満たされるこの感覚は…

「ならば何故俺には教えてくれたのだ？」

「どうしてって言われてもなあ…俺とお前は繋がっているし俺の考えている事はある程度はお前に伝わる…だから隠し事はしなくてもいいかなあ…って。それにドライブにも感謝してるんだよ」

「感謝…だど？」

「そ、きつとドライブに出会わなければオフィス達に出会う前に俺は壊れていただろう…それにドライブ。お前は俺の大事な相棒であるとともに大切な家族なんだよ」

ああ、俺は嬉しいのか…相棒の力になれる事が。今まで道具のように扱われてきたこの俺を家族と言ってくれた事が

「…ドライブ」

「何だ？」

「これからも俺と戦ってくれるか？」

決まっている

「当たり前だろ。お互い力尽きるその時まで俺は相棒と共にある」

「ありがとうな。相棒」

「フツ、別に礼などいらん。あ、時に相棒」

「ん？」

「あの三人の中では誰が好きなのだ？」

「フア!？」

一誠 side

「ちよつと待て!何故そういう話になった!？」

「いや、前から思ったおつたのだがな?相棒は誰が好きなのだろうって。時々話をするとき黙っていたらろ?」

「ああ、そんな事もあったな」

「あれな、ずつとそれで悩んでいたからだ」

「え!?!そんな理由で黙ってたの!?!」

「いい加減教えろよく相棒!」

「… いいけどさあ」

「え?」

「何だよ、え?つて」

「自分のから聞いたが本当にいたのか?」

「… いるっちゃあいる」

「ほう。気になるなあ」

「俺の好きなのは…」

俺がドライグに好きな者の名前を教えようすると

「一誠く?上がったにやんよ!」

「へい。つて事でドライグ。その話はまた今度だ」

「仕方ないな。その話は楽しみにとっておこう。俺はもう寝る… おやすみ相棒」

「おう。おやすみドライグ」

… いか俺のお想いは伝えるとしよう。それまでは俺を変えてくれた大切な家族との日常を過ごすとしよう

墮天使、シスターとの出会い

一誠 side

よお、お前ら！一誠だ！ん？何で俺がこんなテンションが高いかだつて？それはだなあ。昨夜戦ったグレモリー達が思ったより傷が深かったらしく、しばらく学校を休むらしい。つまり！俺はしばらく自由の身！いらぬ事を考えなくてすむ。私はあ…自由だああああ!!ダアアハッハッハッハア!!

『キャラ崩壊が凄いで相棒?』

「キャラ崩壊?なんだそれ?」

『… 感じろ、フィーリングだ』

自由なんだが他の問題はあ

『触れろく…』

この学園には魔王の妹が二人いる。まずこの学園の生徒会長。しとりそうな支取蒼那…元いソーナシトリーだ。そしてこいつの姉はセラフオルー・レイヴァタンという名の魔王だ。そしてもう一人はリアス・グレモリーの兄ザーゼクス・ルシファー。紅髪の魔王《クリームゾン・サタン》の異名を持っており、グレモリー家特有の滅びの魔力を扱っており二人とも昔の戦争で活躍した最上級悪魔らしい

「そーいやドライグはその悪魔はみたことはあるのか?」

『いや、あの時は白いのとの戦いに夢中だったのな。一人一人の悪魔の顔は覚えておらんのだ。すまん』

「いや、大丈夫だ。にしてもどうしようかねえ」

『何がだ?』

「ソーナシトリーや魔王が動き出したらしい。やはり自称この町の管理者リアス・グレモリーがやられたせいかな…まさかあの程度でやられるとは思わなかったがな」

『それはあいつらの情報か?』

「ああ。あの馬鹿どもの情報らしい。気を付けてろよだつてだ…」

『まあ、相棒だったら問題ないだろ』

「当たり前だろ。にしても本当に騒がしいな」

「ああ、騒がしすぎて落ち着けやしない」

そう、グレモリー達が傷だらけの状態で見つけたのが学校で知らされたのだ。生徒は犯人^俺を罵り、木場は二代お嬢様を守る為に戦った騎士だの英雄だのと称えていた。まあ、別に反省も後悔もないがな。ただただ鬱陶しいだけだ

「… 早退するか」

俺は先生に断りを入れ、近所の公園へ向かった。公園に到着すると子供が遊具で遊んだり、鬼ごっこ等々で遊んでいた。俺はベンチに腰を掛けその様子を見ていた

「楽しそうだな」

『そうだな、昔は分からなかったがいいものだな笑顔というものは』

「そうだな。俺はこの子供の笑顔を守らなきゃならない。もう二度と俺みたいな奴をださない為に」

「相棒…」

俺がドライブと話していると

「はわう！」

と可愛いらしい声が聞こえ放り向くとシスターらしい格好をした金髪の女の子が転んでいた

「大丈夫か？」

俺はその子に手を差し出す

「あ、ありがとうございます…!？」

女の子は俺の手を取り立ち上がると驚いた表情をし

「私の言葉が通じるんですか!？」

言葉が通じる…？ああ、この子は外国語を話しているから他の人に伝わらなかったのか

「ああ、通じるぞ？」

すると安堵の表情を浮かべ

「良かったです！道が分からなくてお尋ねしようとしたんですが誰にも伝わらなくて… 通じる人がいて良かったです！」

「結構な荷物だが… 旅行か何かか？」

「いえ、今日からこの町の教会へ赴任する事になったんですが道に

迷ってしまつて…」

教会：…やはりシスターだったのか。にしてもおかしいぞ？この近くの教会に人は居なかつたはずだが…。怪しいなあ

「あ、あの…」

「!?あ、ああもうしわけない。教会だったね？分かつた案内しようか？」

「本当ですか!?ありがとうございます!」

「いえいえ。そういうえば名前は？俺は兵藤一誠だ」

「私はアーシア・アルジェントです!」

「アーシアだな？じゃ案内するから着いてきてくれ」

俺はアーシアを案内しようとしたその時

「うわああああん!」

子供が転んで泣いていた。

膝を擦りむいたようだ

するとシスターが子供の傍へ行く。

「大丈夫ですか？男の子ならこのくらいで泣いてはだめですよ」

と優しく声をかけシスターが子供の頭を撫でてあげた後

子供の擦りむいた膝へ掌を当てた。

すると淡い緑色の光が発せられる。光を浴びた膝の傷が消えていった。

「今のはまさか…」

『ああ。回復の神器だな』

「ありがとう!お姉ちゃん!」

怪我の治つた子供はどこかへ行つてしまつた

「アーシア、その力は…?」

「はい、治癒の力です。神様からいただいた素敵な力なんです!」

アーシアは俺の問いに答えてくれたがその顔は悲しげな顔だつた。きっと俺のように過去に何かあつたのだろうが余計な詮索は止めておこう

「そつか。優しい力なんだな」

そう言つとアーシアは微笑んだがやはりその微笑みも悲しげなも

のだった

「ここだぞ」

「ああ！良かった！本当にありがとうございます！」

俺はアーシアを教会へ連れて行ったが何かがおかしい。数ヶ月前にまでここら辺に気配は無かったが今は気配がある。それも人じゃない……堕天使の気配が四人か。俺のせいで自称この町の管理者が動けないのか……ちよつと調べてみるか

「さて、俺はここで失礼するよ」

「あ、ちよつと待ってください！」

「ん？」

「是非お礼がしたいので、教会まで来ていただけませんか？」

「すまないな。ちよつと用事があつてな……そろそろ行かなきゃならないんだ。だからまた後でもいいかい？」

「そうですか……分かりました！では、また今度お礼をさせていただきますー！」

「じゃあその時はよろしく頼むよ。c i a o」

俺はそこから人気のない場所へ移動し家と戻り準備を始める

それから数時間が経ち夜になり行動を開始する

『にしても相棒が見ず知らずの女の為に堕天使の潜伏先へ向かうとはな……正直驚いている』

「別に驚く事はない……黒歌の時と変わらないだろ？」

「あの時は悪魔が絡んでいたから相棒が気になって行ったんだろ？だが今回は堕天使。相棒が動くのではないだろ？それともよほどあのシスターの事が気になるのか？」

「ああ。今行かないと面倒な事になりそうだし…。面倒な事になる前に片付けておいた方が後々楽だしな…。っし行くか！」

? エボルドライバー!?

エボルドライバーを装着しエボルボトルをセットする

コブラ! ライダーシステム!

エボリューション!

「Are you ready?」

「変身」

コブラ… コブラ… エボルコブラ! フツハツハツ!

「さあて、準備完了」

俺は高速移動で移動し墮天使に見つからないように隠れる

「いよいよ明日アザゼル様達に認めてもらえるわ!」

「私を見下してた奴を見返せるっすね!!」

ふくん… 聞くからにくだらないなあ…。無駄に盛り上がってる

し。まあ、いいか

「ごきげんよう? 墮ちた天使達?」

三人称side

エボルが墮天使の前に姿を現すと警戒して光の槍を出現させ構え、相対する

「貴様何者だ! 気配からして人間ではないな!」

「俺の名は仮面ライダーエボル。まあ、知っているが知らないがはぐれ悪魔狩りをしている張本人だ」

とエボルは腰に手を当て楽な体勢をとりながら質問に答えていく

「そのエボルが私達に何のようかしら?」

「おおそうだった! 単刀直入に聞こう。貴様らはアジア・アルジェントをどうするつもりだ?」

と質問をすると墮天使達は驚きながらも殺気をだしながら槍を構え、今にも飛びかかる姿勢をとっている

「その事を知っているなら帰す訳には行かない! 貴様にはここで死んでもらう!」

墮天使はエボルに四方向から飛びかかり槍をふるって来るが回し

蹴りの風圧で墮天使達は吹き飛ぶ。瞬間、青い髪の女の墮天使に近づき右手で女の頭を掴み地面へ叩きつける。そして空中へ浮かび上がった墮天使を確認しドライバーのレバーを回す

? Ready go ! エボルテックファイニッシュ! ciao
く?

右腕にエネルギーが溜まり殴り飛ばし壁に激突し壁が崩れる。崩れたその場所には絶命した女がいた

「カラワーナああああ!!」

リーダー格の女は驚愕し、金髪の墮天使は泣き崩れ、男の墮天使はエボルを睨み付け

「貴様ああ!!」

光の槍を放り投げるがエボルは焦る事なく冷静に対処する。投げつけられた光の槍を掴み取り

「返すぞ」

光の槍を投げた張本人である男へ向かって投げる。目に見えないスピードで投げ腹へ突き刺さる。

「グアアッ!」

「これで終わりじゃないぞ」

エボルはドリル型の武器ドリルクラッシャーを出現させる。そしてエボルはユニコーンフルボトルをドリルクラッシャーへ装填する

? Ready go く! ボルテックブレイク!?

エボルは肉薄しブレードモードを高速回転させユニコーンの角を模したエネルギーを纏わせ男の胴体を貫く。そしてエネルギーで内側から男の体が削れていく音が聞こえ血が辺りに飛び散り、男の体は跡形も無くなっていった。

「さあ…次はどっち…だ?」

エボルが二人の墮天使を殺し残った墮天使の方へ振り向くと金髪の墮天使とリーダー格は泣きじやくっついていて戦い…元い話ができるような状況では無かった

一誠side

「…やり過ぎたか?」

『当たり前だろ。どうするんだ？話できるような状況じゃないし、今の相棒血だらけだぞ？』

やり過ぎた… どうしようどっちも泣きじゃくってるよ…と迷っている

「ごめんなさい… 全て話ますから… 殺さないでください… グス」

リーダー格の女は謝りもう一人は泣きすぎて酷い顔になっている

「分かったから泣くな。その金髪の墮天使も」

だがやはり泣き止まず数十分程で泣き止んだ

「そういえば君らの名は？」

「レイナーレです。」

「ミッテルトつす」

「レイナーレにミッテルトだな？とりあえず場所を変えよう。俺に掴まれ」

とレイナーレ達が俺に掴まったのを確認した後に瞬間移動で家へと帰る

「さて、着いたぞ」

「お、お邪魔します」

さて、事と次第によつてはあの研究バカに連絡いれないと駄目だな。とりあえず今は話に専念するでしょう

アーシアの過去

一誠 side

「さて… まずあの教会で何をしていた？」

「実は…」

レイナーレとミツテルトの話によると、自分達は周りの墮天使に比べれば力が無く、周りから蔑まれたり、辛い仕打を受けていたらしい…。その為、珍しい神器を持ったアーシアを保護した後には神器を抜き取り、力を手にいれ墮天使達の認識を変えさせ、幹部からも認められようと…。そして研究バカにも認めてもらおうとしたらしい「なるほどなあ。まあ、周りから認められようとするのは分かる。その為にどうすればいいか…。考えた事までは認めてやる。だが…」

「?？」

人の命を奪ってまで掴む力なんてありやしないんだよ

「…」

んく黙ってしまったか。まあ、とりあえず

「とりあえずレイナーレとミツテルトは二人でアーシアを連れてこい。ちゃんと事情を説明しながらな？」

「分かりました（つす）」

レイナーレとミツテルトはアーシアを迎えに行くが…。さて…

「文句は後で聞くからその殺気はしまってくださいないか？」

後ろを振り向くと殺気を振り撒く二人と眠たそうな龍神がこちらに近づいてきた。

「一体どうゆうことにや!?!何でここに墮天使を連れてきたにや!?!」

黒歌が俺を揺すり白音も説明求む!という顔をしながらなこちらを見つめ、オーフィスは: 眠たそうなんだよなあ: :

「分かったから! 苦しいから! 一回離して!?!」

「あ、ごめんによ。」

「ようやくと解放された: : : んで説明だな?」

く青年説明中く

「つまり、そのアーシアって子を教会に連れていった時墮天使の気配がして面倒な事になりそうだから見に行ったら戦闘になつて二人始末してきて、残った二人はアーシアを迎えに行つてると?」

「そうゆうこと」

「にしても珍しいわね?」

「何がだ?」

「一誠が朝出会つて教会まで案内した子の為にここまで動いてる事がよ。普段だったらスルーしたはずなのに: : : どうしてにやん?」

「黒歌もドライブと同じことを言うんだな: : : 俺ってそんな感じか?」

「二うん」

お前ら二人十一匹同時に頷くんじやないよ: : :

「別に大した理由はないよ。俺が自称町の管理者を病院送りにしたせいで動けないから変わりに動いているだけだよ: : : 」

「ふくん: : : でも他にも理由があるんじゃない?」

「さあな: : : まあ、そこまで気にしなくていいよ。あ、連絡の準備しなきゃな」

「連絡つて: : : 誰ににやん?」

「^{アザゼル}研究バカにだ」

と答えると再び黒歌が俺の方を揺らし

「ちよつと待つにやん!?!アザゼルって墮天使総督のアザゼルにやん!?!」

「おう。そのアザゼルだが: : : どした? 黒歌も白音も何をそんな驚い

てんだ?」

「どうしたじやありませんよ!? 墮天使総督と知り合いだったんですか!?」

「あれ? 言っただけじゃなかったっけ?」

「聞いてないです! (にや!)」

「あくごめん。知ってるのはオーフィスだけだったな。今の話が終わったらアザゼルと会った経緯を教えるから落ち着いてくれない? 苦しいから。後、オーフィスをどうにかしてくれない?」

二人は渋々納得してくれた様子だったがオーフィスは眠気が勝つたのか体を俺の方に向け、首に腕を回し、足を開き俺の膝に座っている。まあ、俗い対面座位というものだ。だが…

「んうう…」

俺の理性が削られるんだよおお!! 寝るのはいいよ!? だけでもオーフィスの色っぽい吐息がかかると俺の理性がヤバイんだよおおお!! 誰でもいいから早くどうにかしてえええ!!

〜数分後〜

あの後黒歌と白音に手伝ってもらい、オーフィスを離してもらい、部屋に戻ってもらった。

「あく疲れた… 戦いより疲れるってどうゆう事?」

などと独り言を呟いていると

ピンポーン

「帰ってきたか… 入っていいぞお〜」

「戻りました… 何でそんなに汗だくなんすか?」

「ああ… 気にするな。色々あったんだよ… それで? アーシアは?」

「ここに…」

「お、お邪魔します…。い、一誠さん？」

「よう。今朝ぶりだなアーシア…。その感じだと事の事情は全て聞いたらしいな…。信じられないか？」

部屋に入ってきたアーシアはとても暗く、悲しい顔をしていた。それもそうだろう保護してくれた奴らが自分の神器を目的に近づき殺そうしていた事何て知りたくもなかったはずだ。

「実際信じられません…。レイナー様とミツテル様が私を殺そうとしていたなんて…。本当ですか？」

「残念だが、全て事実だ…。だが、今の所少なからずあの二人はその感じはないが…。どうする？」

「え？」

突然問われた事で不思議な顔をするアーシア。二人も同じような顔をしている。だろうな…。アーシアに悪いが…。

カチャ

俺はレイナー様とミツテル様にトランスチームガン、ネビュラスチームガン突きつける。

「一誠さん!?!何を!?!」

「アーシア。苦しいかも知れないが君が決めるんだ…。この二人を生かすか殺すかを」

「私が…。レイナー様とミツテル様を？」

「そうだ、君が今朝子供の傷を治した力…。あれは神器という物だ。」

「神器？」

「そうだ。神器は人の魂…。つまり命と直結している。その為、神器

がアジアから抜き取られれば死んでしまう。だからこの二人が行おうとしていた事は許される事ではない。…… さあ？どうする？」

俺は正直少なからず悩むだろうと思っていた。見ず知らずの子供が転び、膝を擦りむきその親にどんな目でみられようと笑顔で助けに行き怪我を治す。例えどんなに優しくとも、自分を殺そうとした者達許す訳がない…… と思っていたがその期待は裏切られた。

「私は…… レイナー様達を許します。」

「?!」

「…… 分かっているのか？こいつらは……！」

「分かっています…… それでも私はこの二人に救われたんです！」

「救われた？どういう事だ？」

そう聞くとアジアは一筋の涙を流す。だが、アジアの涙は絶えず流れていく。

俺は知りたくなってしまった。何故そこまで悲しい顔をするのかを…… 過去を知りたくなってしまった。

「聞いてもらえますか……？」

「ああ。」

「私は欧州のとある地方で生まれました……。ですがすぐに両親に捨てられ教会の孤児院で身寄りのない子供達と暮らしていました……。そしてこの力が宿ったのは八つの頃です。偶然、怪我をした犬を治療していた所を教会の人にみられていたんです……。それから私は聖女と祭り上げられ、それからの毎日は教会の本部で多くの人を治療し続けました。それから噂を聞き付けた人達が毎日、毎日教会にやってきました。それでも私はこの力で多くの人が救えるなら…… 頑張ってたんです。でも…… 気づいてしまったんです。私の使うこの力を…… 私を、異質のような目でみられていた事を……。ですがこことある事件が起きました。」

そこで一区切りし、息を整えた後再び語り始める

「ある日、私は悪魔払いに追われ深い傷を負った悪魔と遭遇しまし

た。… 本当なら教会に伝え滅ぼさなきゃいけないんですが私は見捨てられなかったんです。そこで私はその悪魔を治癒しました。ですがその光景をみられていてそれを教会の者に伝えられていました。…そしてそれを聞いた者達、その噂を聞いた者達は私を魔女として教会から追放されてしまいました。…」

悪魔を治療… 本来ならそれはあり得ないと、教会側では常識の事だった。本来は人間の傷を治す為で、悪魔や墮天使を癒せる訳はない。逆に聖なる力でダメージを負うのだ。だが、過去に例外があったらしい… 神の加護を受けない悪魔や墮天使ををの癒せる魔女の力が。

「そんな時にレイナーレ様達が私を保護してくださいました… ですが、私の周りには誰もいませんでした… 私を助けてくれる人もいません… きつと私の祈りが足らなかったんでしょう。私って抜けてるところがありますし…」

笑いながら涙を拭うアシア… アシアの過去は想像を絶するものだった。聖女と崇められていた少女が優しさで治癒しただけでどん底まで叩き落とされ魔女として罵られた。

「でも、きつとこれも主の試練なんです！ダメなシスターな私に修行をつけさせてくれるんです！それが終わればきつと…」

もう… 喋らなくていい

俺はアシアに近づきそつと抱き寄せる

「辛かったよな… もう我慢しなくていい。主の試練とか関係ない。

ここは教会じゃねえ… アシアの好きな事をやってもいい。」

「で、ですが…」

「そんな悲しい顔をするな… アシア… お前の欲望を解放しろ。お前がやりたかった事をやればいい。」

「… 私、日本語も読めないですし書けないですよ？日本の事も全く知りませんよ？」

「俺が… 俺達が教えてやる。日本の良いところも教えてやる。自分の趣味でもなんでもやっていいんだ。アシア… 俺達がアシアの側にいるから… な？」

俺はアーシアの頭を撫でながら呟くとアーシアは俺の背中に腕を回し

「… うっ… わああああああん!!! 私… 本当は友達欲しかった!!子供達とも遊びたかった!!なのに… なのに!!」

「俺が友達になるから… 一緒に遊びにも行こう。だから今は泣いて、泣いて溜まったものを全て…!」

「うわあああああん!!」

大声で泣き出した… 本当に辛かっただろう。周りには誰も居らず見捨てられてきた少女。だが、その少女の願いはただ友達が欲しい。遊びに行きたかったという… 普通の願い…。叶えよう。もう二度とこんな涙をみないために

「収まったか？」

「はい… グスッ」

泣き止んだアーシアは目が真っ赤になっていて涙の後が見えるが、何処と無くスツキリとした感じだった。

「アーシア達は待つてくれ。俺はちよつと連絡してくるから。」
「連絡って何処につきすか？」

俺は立ち上がり部屋をでようとするが、ミッテルトが聞いてくる… が涙の後が見える。アーシアの話聞き、レイナーレとミッテルトは涙を流しアーシアに謝罪をしていた。

「お前らのボスだよ？」

「え？それって・・・」

「墮天使総督アザゼルさ・・・ あ、もしもし？一誠だ。ちょっと急用だな。実はお前らの部下達が潜伏してて神器を奪おとしててな？・・・人の話は最後まで聞け。それで悪いがその部下は俺が始末してしまつた・・・ 悪い。残り二人と神器所有者は保護してる。それで頼みがある。今から部下二人を返すが、重い処罰は止めてくれないか？問題は片付いたからさ・・・ 頼めた義理じゃないが頼む・・・ 悪いな。神器所有者？俺が保護する。それで例の件も頼みたいんだが・・・ ありがとう。おう・・・ ああ？神器？回復系だが？ほう・・・ 了解した。またな。という訳だ」

「どういう訳つすか!?なんでアザゼル様と知り合いなんすか!？」

「ああもうそれはあいつに聞け。とりあえずお前らもう帰れ。話はしといたから。」

「わ、分かりました」

そしてレイナーレ達は魔方陣を展開転移していった。

「さてと、あいつらにも事情を説明しないと？」

と、黒歌達を呼びに行こうとするとアシアが腕の袖を掴む。振り返るとアシアは今まででいい笑顔で

「これからよろしくお願いします！一誠さん！」

「ああ！」

守ろう・・・ この笑顔を守る為に、黒歌も白音もオフィスもアシアも・・・ 俺の家族を。